



原作・作画
© henka



ケモツ娘

【ゲスト】うごう ゴウ・JITENSHA・八咫 雅
【キャラデザ・ロゴデザ】めえ

「人間が動物に変身できる」「ビーストトランス」という店が近くにあるらしい。でも、一人で行くのは怖いから、一緒に付いて来てほしい」

ある日、月島コノハは、同じ高校のクラスメイト兼幼馴染みの星谷カリンから、そんな奇妙な相談を持ちかけられた。

興味を持った同じクラスメイトの日向テンリも加わり、放課後、女子高生三人でその怪しげな店の実情を確かめることに。

ノリと勢いで店に入ると、「ケモツ娘」と呼ばれる女性に、店の奥へと案内されて……？

獣化あり！ 百合あり！ SFあり！

ちよつとムフフな動物変身コメディ、ここに――開幕！



人間



百合



女子高生

動物変身



獣化



Transfur



ケモノ



【前書き】

この物語はすべて**フィクション**です。作中に登場する人物、団体、用語等は、この物語の設定であり、現実のものとは一切関係ありません。本作品は同人サークル J-Chimera の一次創作物です。無断転載等はお控え下さい。二次創作物に利用したい等、もし何かあれば巻末のメールアドレスにご一報下さい。挿絵は作者修行中のため絵柄が安定せず（ちよつと言いつつ）、また獣化に偏っていますが、本作品の内容を察してご了承下さい。作中での初出の用語は（☆〜）と表記しています。用語集も合わせてお楽しみ下さい。

《目次》

| | |
|-------------------------|-----|
| 【前書き】 | 1 |
| 【本編～第一話 ビーストランス】 | 2 |
| 【ケモ譚用語集&登場キャラクター紹介】 | 102 |
| 【次回予告】 | 105 |
| 【書き下ろし新作～ミューチュアリズム】 | 106 |
| 【おまけコーナー～ゲストイラスト～四コマ漫画】 | 128 |
| 【後書き】 | 134 |

シユは幾星霜なる時空の中で 出現と消失を繰り返してきた
或る時は進化を 或る時は深化を 或る時は神化を

シユは常に変化を強いられ 生き残るために姿形を変えてきた
或る時はラルゴの如く 或る時はプレストの如く

シユは様々な環境適応を試み 派生してきた
或る時は海に 或る時は空に 或る時は陸に

おかげで シユは形態変化を繰り返し
未だ 究極体にはなれずにいる

シユの変わりゆく多様な方向性は すべて変化に内包される
しかし その変化はともおもしろいエサだった

ヒトは「己に辿り着くことができるだろうか
この星で起きた 失われた生命の環を探求する中で

“動物変身”——読んで字の如く、あるモノが動物に変身する現象を指す。

動物変身は現代の漫画や小説などの中だけでなく、童話、お伽話、奇譚の中でも数多く取り扱われ、古来より現代へと伝承されてきた。しかし、この現象は通常、架空のものとして扱われている。また、創作物の中でこの現象は、教訓、戒めの意味合いが濃く、禁忌的なイメージが強い。

しかし、人は禁忌に惹かれるものだ。してはいけないものほど、何故か興味を抱いてしまう。

動物変身が架空のものとして扱われている理由は最も、科学的に不可能だと考えられてきた側面が大きい。

しかし、それはあくまでこれまでの話。ある者は言う、人が想像し得る現象は実現可能な空想である、と。

そう、科学はついに、神の領域をヒトの領域に変えてしまったのだ……

これは、ふとしたことから動物変身を体験してしまった少女達が紡ぐ物語。遠未来を舞台とした動物変身譚が、今ここに始まる——

【第一話 ビーストトランス】

「TF (☆1) ……あ、いや。動物に変身できるってすごく興奮……い、いやいや、すごく興味をそえられることやあらへん？」

何をイキナリ言い出したかと思えば、**そっち系 (☆2)** の話だった。

初夏の昼下がり。いつもと様子が違う星谷カリンを心配して話題を振ったものの、それは思い過ぎだったようだ。

「なーんや、またそっち系の話か。カリンもええ加減そろそろ、人間の男に興味持ちいや」

カリンが何やらもじもじしながら話し始めたところで、ズバツと正論を言うのは日向テマリ。

「え、ええやん。人が何を好きになっても……」

カリンはテマリに圧されてやや劣勢だった。

「まあ、広い世の中、動物やアニメキャラと結婚する人もおるみたいやから、あたしは別にええけどな」

「うう……コノハあくん」

ケラケラ笑うテマリに負け、カリンは月島コノハこと、私に助けを求める。

「そっち系の話じゃ、テマリにや勝てへんね。大人しくお弁当お食べ」

「うう……コノハも冷たいいいいい」

カリンが拗ねた顔をした。

大学受験を控える華の女子高生 (三年)。内申に響く中間テストも何とか終わり、クラスは少しマったりムードだった。特に、今は昼食タイム。午前中の授業に疲れた心と体を癒す貴重な時間。私は仲の良いカリン、テマリと三人で、机を囲んで昼食を食べていた。

カリンと私は幼稚園からの幼馴染み。ずーっとクラスが一緒という腐れ縁。

一方、テマリとはこの春のクラス替えで初めて一緒になった。テマリとの馴れ初めは、四月の席が隣同士だったことから友人関係が始まった。特に、ネタになりやすいカリンの存在が、私達をクラスメイトから友達に格上げさせた。

カリンは悲しそうな顔で持参の弁当にパクつく。テマリはファッション雑誌を眺めつつ、購買で買ったパンを食べている。私も持参の弁当を食べ始めようとしていた。

「あ、その髪型かわええなあ！」

テマリはファッション雑誌を覗き見つつ、コメント。

「せやねー。でもこの髪型するなら、コノハはもうちょい髪伸ばさなあかな」

テマリは女子力を上げたい系女子だ。見た目も性格もお姉系で、私にとっては女子力を上げる参考になるともありがたい存在だ。テマリとの会話はごく



普通の女子高生らしい会話である。

しかし、もう片方。カリンはというと……
「はんあー、昨日、ケモフレ(☆3)で見せてもらうたクルミちゃんの獣化ム
ービー最高やったな！ あれはマジ興奮した。いや、誰でも興奮するやろ、あ
れで興奮せな男やない！ 体が巨大化しちゃって、メイド服がビリビリ破れて、
恥じらうあの表情！ 声！ シチュエーション！ ベッドにダイブして悶絶す
るしかあらへんやろ！ あー、良かった。チョー最高やで！ でもあれ……合
成やないって言ってたなあ……ほんまかなあ……お店を紹介されたけど……で
も、ほんまなら行ってみたい……」
カリンは何か妄想して、一人でブツブツ呟いていた。妄想世界に意識が飛び
過ぎて、彼女の作画が乱れている。

もわもわーん



カリンは妄想世界に旅立った！

「あはは、またカリンが何か一人で妄想しとるで」
「むうう……カリン……」

カリンの妄想癖は、幼馴染みとしては恥ずかしい最大の汚点である。テンリが笑う横で、カリンは涎が垂れそうなほど、ニヤニヤしながら自分の世界に入り浸っていた。

「こうなると……もう放っておくしかないか」

「うへへ。ケモノ(☆4)、ケモノ……」

ケモノ。そう、**「獣」**ではなく、**「ケモノ」**。漢字で書く**「獣」**は、全身に毛が生えている四足の動物――すなわち主に哺乳類を指す。一方、カタカナで書く**「ケモノ」**とは、動物を擬人化したキャラクター全般を指す。同じ呼び名でも漢字表記とカタカナ表記では意味が異なるのだ。

カリンはこのケモノというジャンルが、子供の頃からものすごく好きで、部屋の中はケモノグッズで溢れている。ケモノ好きな人は実のところ、結構多かったりするようだ。しかし、カリンはその中でも**「ヒトがケモノになっていく過程およびその事後」**……ソフトに言えば動物変身、ハードに言えば**「獣化」というジャンル**を特に好んでいる。さらには、最も重視するのはヒトから動物への変身過程の描写があること。人間(ビフォー)↓動物(アフター)、という変身過程が描かれていないものは物足りないらしい。ビフォーアフターだけの単なる**動物変身譚(☆5)**では満足しないのだ。

カリンの風変わりな趣味のせいで、私も普通の人と比べるとそっち系に詳しくなってしまうた。カリン自身は一応、この性癖を隠しているみたいだが、周囲にはバレバレである。

「あ、山田君。最近の面白い漫画、何かあらへん？」

テンリがファッション雑誌を見ていると、**「自己共に全校生徒中、最も漫画やアニメに詳しいと称される、山田サンダーボルト太郎(たろう)が通るかかった」**

「ん？ ー、日向氏が好きそうな漫画か……うーむ、最近、拙者が読んで面白かった漫画は、**「動物王子(☆6)」**かな。一日ごとに違う動物に変身する魔法をかけられた王子が、酒屋の娘と恋仲に落ちる話で――」

妄想中のカリンがピクリと反応した。

「なんや、そっち系か。そっち系は一人で十分。また何かあったら教えてや」
「承知したでござる」

山田は昨日手に入れたらしい漫画を片手に、自分の席に戻っていった。

「**「動物王子」**は名作」

妄想世界から帰ってきたや否や、カリンはテンリに喰らいついた。

「さすがは、カリン様。お詳しい」

テンリがカリンをからかう。しかし、カリンは気にしていない様子だった。

むしろそれよりも重大なことに悩んでいる感じ……といってもそっち系の話だろうが。

「実は……お二人にお願いがあるでござる」

「カリンは山田の個性を奪った。」

「なんや、変にかしこまって……漫画代は貸されへんで」

「テマリが先制攻撃。」

「違う。そうやない。実は一緒に行ってもらいたい……付いてきてほしいお店があるんやけど……」

「カリンが再びもじもじする。朝からのもじもじの原因はこれか。」

「名前は？」

「？　うちは星谷カリンやけど？」

「阿呆、カリンの名前は知つとるわ。店の名前。何て名前の店に行きたいんや？」

「嗚呼、そらそうやな……店の名前は……」

「店の名前は？」

「名前は……」

「名前は？」

「カリンが妙に勿体ぶる。」

「『ビーストトランス(☆7)』」

「ビーストトランス……あ、なるほど。ビーストが獣で、トランスが変身って意味ね」

「テマリが可笑しそうに笑い出した。」

「あははは！　そんなマニアックな店、ほんまにあるんかいな？」

「……。あ、あるに決まってるやろ！」

「ほほーう。ほんまにあるんやったら、付いてったつてもええでー」

「テマリがカリンをからかう。ムキになったカリンは、ケータイでネット検索を始めた。」

「……何でや。ネットで探してもヒットせーへん……」

「カリンはショックを受けた顔をしている。見付からない様子だ。」

「あつた？」

「あらへんわー！」

「テマリのからかいに、ややキレ気味に答えるカリン。」

「あはは。それじゃ無いってことやな」

「あ、あるもん。ビーストトランスは絶対ある！　だ、だから、それを確かめに行くんや」

「カリンの声が小さい。カリン自身もまだ半信半疑なのだろう。しかし、私はもつと大切なことを忘れているような気がしていた。」

「それで、そもそも、その店はどのような店なん？」

そう、名は体を表すと言うが、店の名前だけでは本当にどんな店なのかはわからない。私はカリンに尋ねた。

「えーっと、動物に変身できる店……」

カリンは気恥かしそうに言った。

「あはははは！ カリン、騙されているんちゃうか？ そんな店がほんまにあるなら、とつくに話題なつとるって！」

テンリは愉快そうにケラケラ笑う。一方、カリンは馬鹿にされてテンションダウン。

「もー！ そんな笑うんなら、テンリは来んでええ！ コノハ、一緒に行こ？」

やはり私に回ってきたか。最近、この手のパターンが多い。

「あははは……まあまあ、そう怒りなつて。あたしもほんまにそんな店があるんか気になるから、一緒に行くつてば」

カリン、ジト目。しかし、よっぽど一人では行き辛いのか、結局、最後にはオツケーを出していた。

チャイムが鳴り、いつものようにだべっていた昼食タイムが終わる。カリンが場所を知っているようなので、放課後、早速三人でビーストトランスに足を運んでみるようになった。

この時、私は思っていた。人が動物に変身できる店なんて、本当にあるはずがないとー

――放課後。

「それじゃあ、カリンさん。あたし達を連れてつてちよーだい、そのビーストトランスとやらへ。あははは」

テンリは全く信じていない様子だった。カリンはそれに抗議の目を返しつつも、私達三人で一緒に向かうことにした。

「あ、明日はあたしが日直か。メンドー」

テンリが黒板を見て言った。

私も持って帰る教科書と机の中に置いていく教科書を整理して、カバンに入れるものを選んだ。

「よーし、そんじや行くでー！」

「コノハ、二階から跳ぶ？ 歩いて玄関まで行く？」

教室の出口で上履きから外靴に履き替えたテンリが、私に聞いてきた。

「うーん、今日は跳ぶ！ 私はあと二回分残っていたはず」

「了解！ あたしも最近チャージしたから問題あらへん。カリンは？」

「うちもええよ」

私達は二階の降下エリアから跳ぶことに決めた。カバンの整理ができた私は教室の出口で外靴に履き替え、廊下に出た。外靴専用通路を歩きながら、二階の降下エリアに向かう。

「あれ、今日は多いやん。みんなサボりんぼやねー」

テンリがそう言つて、降下エリアの列に並んだ。私とカリンも続いて並ぶ。

「あー、跳ぶの久々やからドキドキしてきた」

「うちも緊張してきたわ」

私は跳ぶことに緊張しているが、カリンはおそらく、そっち系の店のことで頭がいっぱいなのだろう。

「それじゃ、お先」

順番が来たテンリがそう言つて、二階から跳び降りた。

「次は私つと」

テンリが吸い込まれるように地面に落下していく。しかし、地面に着く直前、一瞬ふわりと降下速度が緩やかになり、ふわりと着地した。着地したテンリが私の方を見て、おいでおいでと手を招く。

「腕輪ハネ式ワ小型反重力装置ツ(☆8)を嵌めて、起動つとー」

私はカワイイ羽のアクセサリが付いている腕輪を手首に装着し、ボタンを押して、反重力陣を展開した。足元に展開された反重力陣から淡く黄色い光が立ち上り、私の全身を包み込む。

「あと二回……またチャージしとかんと」

私はハネワに表示されている使用回数を確認してから、地面を見た。二階と例えば、通常人がジャンプする高さではない。しかし、歩いて昇降口から外に出るよりも、跳んだ方がショートカットになるのだ。お小遣いの節約のために、最近では跳んでいなかった。

「い、行くで……と、とおっ！」

自分自身に大丈夫と言い聞かせ、私は二階から跳躍した――

――時は三十八世紀(☆9)。

二十一世紀初頭に衰退し、

数世紀の間、低迷していた

人類の文明は人口増加と共に

再び開花していた。

ハネワはその技術の代表の

ようなものである。重さの

粒子を特定してから、人々は

重力に反する力を探索し、



その開発に勤しんだ。その結果、通称「ハネワ」と呼ばれる腕輪式小型反重量装置の開発に成功したのである。ハネワは腕輪のボタンを押して起動させると、五階程度の高さまでなら、着地直前に自動で反重力粒子を全身に纏い、重力を相殺して、緩やかに着地することができる。跳躍前に展開する反重力陣は単なる演出であるが、雰囲気が良いとのこと。人気が出た。大きな建物や集団生活をするような建物には、ハネワを使って降下できるようなエリアが設けられている。これは火事や震災などの災害が起きた場合、速やかに外に脱出できるように、との配慮のためだ。小学校の避難訓練にもハネワの使い方の授業がある。ハネワには使用回数があり、使い切ると専門店で特殊なエネルギーをチャージしなければ、再び使うことはできなくなる――

私は二階から宙を舞う。空を飛ぶというよりは、落下するという方が適切だ。しかし、通常、ジャンプしない高さからの跳躍は、十分な気分転換と、好奇心を満たすことができる。

パラグライダーなどに比べると、跳躍はほんの一瞬で終わってしまう。私は地面にぶつかる直前に、体が軽くなるのを感じた。束の間の無重力。そして、足を伸ばすと、地面に触れ、再び重力に支配された。

「ふう……」

毎度ながら、私は、この落ちるという感覚は慣れない。まだ心臓はバクバクしている。しかし、たまに跳びたくなるのだ。好きな人は好きなようで、毎日のように跳んでいる。

私が着地して心を落ち着かせていると、カリンがジャンプするのが見えた。

「お疲れさん〜！」

カリンが着地すると、ケータイをいじっていたテンリがやって来た。

「たまにやるのはいいけど、跳ぶのは何か疲れるわー。それにチャージ高いし！」
跳ぶのが楽しいからって、チャージばかりしていると、すぐにお小遣いの底が尽きてしまう。

「はあく、うち、めつちやドキドキしてる……」

着地してやってきたカリンの第一声は、どちらのことかわからなかった。

学校帰り。カリンの道案内で件の店に向かう。駅前のメイン通りから外れ、裏路地の方へ。

「なあ、カリン。もしかして、そのビーストなんちゃらってのは、そっち系のお店なん？」

「ビーストトランス！ う、うちも初めてやかから行ってみなわからん……」
と、言いつつも、カリンはやや強ばった面持ちになっていた。

私もどんな店なのか、非常に不安になってきた。何故なら、私達が今歩いて
いる場所は、風俗街だからである。恋愛には奥手のカリンも、さすがに気付い
ているようで、落ち着かない様子だ。

「こ、こんな時は――これや！」

カリンがそう言つて、カバンからやたらもふもふした何かを取り出した。

「何やこれ？」

「不思議生物・第一弾 “もふもふ(☆10)”」

「もふもふ？」

「もふもふ」

もふもふらしい。いや、それだ

けではよくわからない。

「ほっぺの辺りを押すと――」

もっふも！

と、可愛らしい鳴き声が出た。

「癒されるうううううー」

「……」

カリンの緊張は解けたらしい。

「私にも貸して」

「ええよー」

カリンからもふもふを借りた。

毛玉？ をもつとふんわりさせたような手触りで、触り心地は意外に良い。

もふつと親指で強く押してみた。

もっふも！

鳴き声が出た。

「……」

意外に癒されるかもしれないことが判明。少し欲しくなった。

「あ、これ、あたし知っているわ。女子高生の間で最近流行っているんよね。
持つてへんけど」

テンリも知っていたらしい。もう一度親指で押してみる。

もっふも！

これ以上、触ると本格的に欲しくなりそうだったので、カリンに返した。

もふもふに癒され、緊張が解けた私達は、とうとう、件の店に辿り着いた。

「ビースト……トランス……間違いない。ここや……」

「ほ、ほんまにそんな変な名前の店あるんやなー」

カリンがブルブルと感動を体で表現し、テンリが非常に驚いた顔をした。風



俗街の真っ只中、さて、この店はそっち系の店なのか……？

道路に通学カバンを置いて一呼吸。一言で言うと、ピンクい。そして、ビーストという野獸的な感じではなく、どちらかと言うと、アニマルといった可愛い感じの建物。他の建物よりも高いので、余計に目立つ。壁に裝飾されている動物のシルエットは謎の技術で発光している。気になるお店だが、入りたくはない。そんな第一印象だ。路地裏と言えど、駅前にこんな目立つ店があるのに、何故、今まで一度もこの店の話を聞かなかったのか不思議なくらいだ。ビーストトランスは、それほど風俗街で異様に異彩を放っていた。



「は、入るで！」

「ほ、ほんまに入るん？ ここに？」

私はカリンを止めようとしたが、カリンはズンズン店の扉に近付いて行く。私はテンリに助けを求めた。しかし、テンリも興味深々といった様子。私がおろおろしているうちに、カリンはとうとう店の前に立ち、扉を開けた――

――いつだって運命を変える出来事は突然に訪れ、過ぎ去っていく――



「いらつしやいまいん？」

カリンが扉を開けると、ロビーの受付に顎ヒゲを生やしたメガネのお兄さんがいた。お兄さんは笑顔で私達を迎えようとしたが、すぐにその笑顔を消した。

「その制服は、尾天高校の制服だな……君らは高校生か？」

お兄さんの顔が険しくなる。座っていた受付のカウンターから立ち上がり、私達の前にやって来る。何故かエプロンのようなものを着ていた。

「君ら、ここがどういう店かわかっているか？ 周りの店を見ればわかると思うが、ここもそういう店だ。他店は違うかもしれないが、うちは高校生は取らない主義でね。申し訳ないが、興味があるのなら卒業してからにしてー」

お兄さんが私達を追い返そうと話をしていると、カリンが大きく息を吸い込み、何か呪文のような恥ずかしい言葉を叫んだ。

「ケッモケモケモ！（☆11）」

「!!」

カリンは恥ずかしい呪文を唱えた！

カリンが奇怪で恥ずかしい言葉を発した瞬間、お兄さんに衝撃の稲妻が走った……気がした。ハツと大きく目を見開き、カリンの方を見返す。カリンはMPを使った後のように、やや疲れた顔をしていた。

「そ、その合言葉はどこで……?」

お兄さんが驚いた顔をしながら、カリンに問う。ん? 合言葉……?

「はあ……はあ……ケモフレで……クルミちゃんから……」

「……なるほど」

お兄さんはしばし、難しい顔をした後、改めて私達の方に向き直った。

「先程は早とちりしてしまい申し訳ない。改めて、歓迎しよう。ようこそビーストトランスへ。その合言葉を知っているということは、君達はTFクラスタという認識でよろしいかな?」

「は、はい!」

カリンが壊れたオモチャみたいなのに、激しく上下に首を何度も振った。私はお兄さんの態度が激変したことに驚いた。『TF』という言葉……ものすごく聞き覚えがある……

「クルミからの紹介とあれば、君達は本物だ。当店の利用は初めてかな?」

「はいいいいいいいいい!」

カリンが再び、こくんこくんこくと激しく頷いた。

「わかった。少し待っていてくれ」

お兄さんはニコリと微笑むと、受付に戻ってどこかに電話を掛け始めた。

「テ、テンリ、この展開は……?」

「よ、ようわからんで、コノハ……」

テンリも予想外の展開に困惑している面持ちだった。

「風俗側での訪問なら、君達を追い返そうと思ったのだが、獣化側での訪問なら、君達を歓迎しよう」

電話を掛け終えたお兄さんは、ニコニコと微笑みながら、再び私達の前にやって来た。と言うか、い、今、『獣化』って言った!

「あ、ありがとうございますです!」

カリンが興奮しすぎて、奇妙な敬語を使う。カリンが敬語を使うだなんて……非常に稀だ。帰りに雨が降らないだろうか?

「今、『ケモツ娘(☆12)』を呼んだ。すぐに来る」

「おお……おおおおおおおー! キエエエエエエエー!」

カリンが大きな声で奇声を発する。これから私達は一体どうなってしまうのか? 正直、カリンとお兄さんの会話についていけなかった。

「もしかして、ケ、ケツ、ケモツ、ケモツ娘はクルミちゃんですか?」

「うーむ。残念だが、クルミは今日出勤していないんだ」

「そうですか……会いたかったなあ……」
カリンが少し残念そうな顔をした。
「それにしても女子高生三人とは珍しい。君が一番詳しいようだが、他の二人もTFクラスタなのか？」
「えーっと、そう……ですね。うちが根っからの獣化スキード、後の二人は友達で『やや興味あり』ってところですよ」
カリンが私とテンリに聞くこともなく、サクッと紹介してくれた。その紹介にちよつと待てと言おうとすると、店の奥から女の人が現れた。
「お待たせしましたー。テンチョー、この子達？」
店の奥からやって来たのは、細身の優しそうな女の人だった。



「そうそう。クルミからの紹介らしい……あ、サラ！ ネームプレート付けていないじゃないか！」
「あ、部屋に忘れて来たわ。まあまあ、テンチョー。そんな厳しい顔しないで」
女の人はお兄さんのことをテンチョーと呼ぶ。テンチョーつてもしかして……
店長？ この店の一番偉い人？ 私はそう思って、お兄さんの首から下げているネームプレートを注視した。
「店……長……だ……だ……！」
しかもネームプレートには、店長・店長と二回繰り返して強調されている！
私は少し戦慄した。そんな偉い人に失礼な態度は取っていないなかっただろうか？
「従業員には徹底した接客姿勢をだな……まあいい。サラ、この子達三人を案内してあげて欲しい。電話で話したとおり、うちの店は初めてとのことだ」

「はい。わかりました」

サラと呼ばれた女の人は店長にそう言うってから、私達の方を向いてニコリと微笑んだ。

「わたしはサラ。この店で“ケモツ娘”をやらせてもらっています。今日はみんなの担当をすることになったので、よろしくね」

「は、はいっ！」

サラが自己紹介し、カリンが元気良く返事を返した。

私とテンリは何が始まるのか全くわからず、事の成り行きを見ているしかなかった。

「フリーでいいから、後のことはサラに任せた」

「りよーかいでーす、テンチョー。それじゃあみんな、行きましようか」

店長とサラのやりとりが終わった後、サラは私達を店の奥へと案内しようとする。付いて行っても大丈夫……なのだろうか？

「テ、テンリ、どないしよう？」

引き返すなら今しかない。もう二度と来ないのであれば、扉に向かって真っ直ぐ走るだけでいい。

「うーん……」

テンリも迷っているようだった。確かにどんな店なのか興味は湧くが……

「コノハ、テンリ、行くでー」

カリンは既にサラの後をひよいひよい付いて行っている。

「……」

どうしよう。怪しい店……場の流れに任せてもいいのだろうか？

「コノハ、行ってみようや」

「まじかー」

私が行きたくないようになりアクションを見ると、テンリが少し笑った。

「どうせ大したことあらへんって。パパツと見て帰ろうや」

「うーん……テンリがそう言うんなら……」

テンリはこの店がどんな店か興味深々といった様子。私は怪しい店にはあまり関わりたくなかったのだが……みんなが行くなら、行くしかないように思えてきた。何だろう、この、赤信号みんなで渡れば怖くないかな……

「早う、早う！」

カリンの声が遠くから聞こえる。

「はい、はい！ 行ってみようや、コノハ」

「うん……」

私は乗り気じやないまま、テンリと共に、サラとカリンの後を追った。

サラの後を付いて行く。いくつも扉があるカラオケ店のような通路を通る。

「ヒヒーン！ ああっ！ ヒヒヒーン！」

扉の奥からウマの鳴き声と人の声が聞こえた。

「テンリ、何か今、言わへんかった？」

「ん？ 何も言うてないよ？」

テンリにはこの声は聞こえていないようだった。私は聞き間違いかなと思いい、歩みを進める。

「パオオオオーン！ ふにやああああーん！」

「!？」

今度はゾウとネコ系統の鳴き声が聞こえた。やっぱり何かいる……扉の窓を除いてみるが、外からは見えない構造になっているらしく、扉の奥に何がいるのかはわからない。薄気味悪い……

「……」

カリン曰く、ここは動物に変身できる店。もし本当なら、人体実験とか、変な生物をつくっていたりしてもおかしくはない。扉の奥から奇妙な動物の鳴き声が聞こえる度、私は怖くなって目を瞑った。

「さあ、着いたわよ。この部屋に入って」

サラはそう言って扉を開ける。カリンが喜んで真っ先に入った。続いてテンリ。私は恐る恐る中を覗き見て――

「あ！ 何か、すごい……」

部屋を見た瞬間、警戒心が一気に消えた。メルヘンチックというか……動物のぬいぐるみがいっぱいあって、可愛らしい部屋に心が奪われた。

「素敵でしょう？」

サラが最後に部屋に入り、扉を閉める。そして、同意を求めるように聞きました。

「すごく良いですよ！ ガワイワイ！」

カリンが部屋を見て興奮している。つつい忘れがちになるのだが、一応、カリンも女の子だった。

みんな入口で靴を脱ぎ、私達は通学カバンを持ったまま床に上がった。

「わあっ！」

ビックリした。床がふわふわしている。さっきまでの警戒心は完全に消え去り、この不思議部屋を楽しんでいる自分がいた。

「はいはい、みんな適当に座って。あ、みんなとはそんなに年が離れていないしと思うし、普通に話す感じでいかせてもらおうわね」

サラはそう言って、微笑んだ。

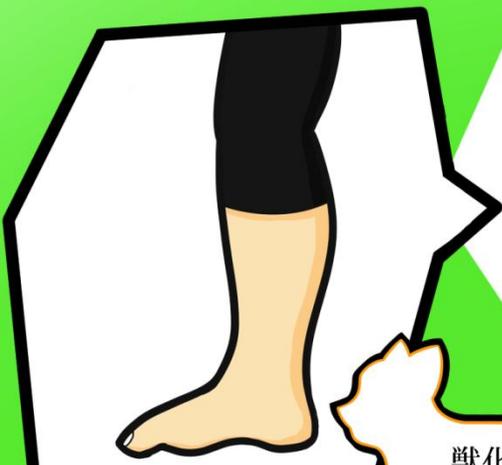
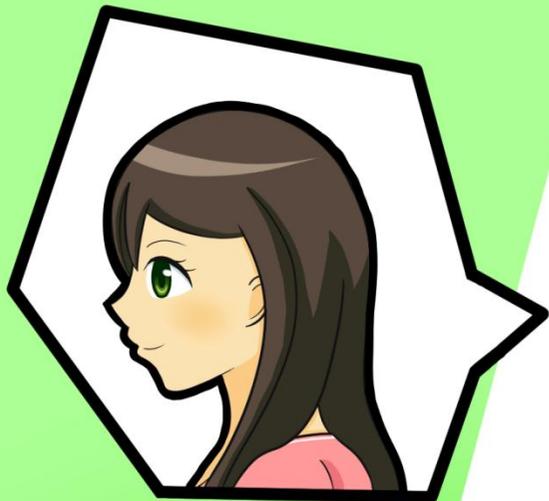
私達はサラの指示で、通学カバンを部屋の隅に置き、床に座った。

「それじゃあ、もう一度、わたしの自己紹介と、この店の説明を簡単にするわね。わたしのケモツ娘名はサラ。今日はよろしくね。ケモツ娘っていうのは、“ケモノに変身する女の子”って意味でお客さんが私達に付けた愛称のことなの。ちなみに男の子の場合は“モフメン”とか呼ばれているわ。この店、ビーストトランスは、表向き普通の風俗店なんだけど、裏の顔は店名のとおり、動物……獣に変身できるお店なの。あ、その二人は信じてないなー」

サラはそう言って笑った。二人とは私とテンリのことのようだ。

「百聞は一見に如かずって言うし……早速、実際に見てもらいましょう」

「？」



獣化率0%:体に異常はみられない

「すう……はあ……」

サラが立ったまま大きく深呼吸を始めた。深呼吸を始めると、すぐにサラの体に何かが起こっているのを感じ取った。

「えっ……なんなん……う、嘘や……ええっ!？」

サラの体が変わっていく……立体映像との合成にも見えない。信じられない。サラの耳は少しずつ大きくなり、先端がピンと尖って、茶色い毛が生えた。

手は少し太く、爪は鋭く尖り、指先から焦げ茶色の毛が生えていく。足は踵が上方に移動し、浮き足状態に。足の爪も鋭くなり、先端から焦げ茶色の毛が生えていく。鼻の周りには白い産毛が生え、鼻自体は黒ずみ始めた……



獣化率16%:熱・震えが生じ末端から変化

「ほんまに……変身……している……」

私は目を疑う。しかし、ほつぺたを抓っても痛い。夢じゃない。

サラの耳は動物の耳のような形に変化してピンと立ち、キツネ色の毛に覆われた。耳の中からは白い耳毛が外に向かって生える。手の指は丸くなり、内側には肉球らしきものが見えた。手の先から脇の方へと茶色の毛が生えていく。足も先端から毛で覆われていき、踵はすっかり伸びて関節が逆に曲がり始めた。破れる膝当て、ズレ落ちるパンツ。胸の下に小さなくつかの膨らみが現れた。

黒ずんで三角の形になった鼻の先端は前方へと突き出し、首は白い毛で覆われた。サラは苦しそうに目を細め、舌を出し、体を震わす。



獣化率43%:獣毛が濃くなり、骨格も変化

「はあ……はあ……うぐうう……」

サラは目を閉じ、苦しそうな声で呻く。膝当てはボロボロに破れさり、パンツが完全にズレ落ちたかと思うと、スカートも落ち始め、上着がたゆんできた。体が小さくなっている。気が付かなかったが、いつの間にかお尻からシツポが生えていた。耳は頭の上へ上へと移動。髪は先端から、体毛と同じキツネ色に染まりながら短くなる。手の指は非常に短くなった。逆に曲がり始めた関節はより強調された。そして、体の露出部分はすべて毛に覆われてしまった。

「キ、キツネや……」

ここまでくるともう、何の動物に変身しているのかは一目瞭然だった。



獣化率61%: 獣人形態を超え、獣へと変化

しかし、サラの変身はまだ終わらない。手は最早、前足と表現した方がいいかもしれない。体が縮み、着ていたものはすべて脱げ落ちた。サラは脱げた衣類の上に乗る舌を出した。それは本当に、動物が舌を出して体温調節しているかのようだ。髪はほとんど体毛と同化し、区別が付かない。シツポはさらにボリュームを増し、ふさふさとして触り心地が良さそうに見えた。閉じていた目を開くと白目の部分がヒトより減少。黒目部分が大きい、動物特有の形状で、瞳孔はネコのように縦長に変わっていた。

「ハツ……ハツ……ハツ……」

呼吸の仕方も変わる。二本足で立てなくなったサラは前足を床に着いた。



獣化率87%:体が縮み、四足に変化

「変身……しよった……サラさんがキツネになりおった！」

時間にして十分くらいだっただろうか。しかし、それは本当に一瞬の出来事のように感じられた。目が離せなかった。サラの変身に魅入られていた。人が動物に変身するなんて魔法みたいな現象が、目の前で起こったのだ。私はその現象を前にして、うわあっ！と驚くというよりは、あまりにも現実離れた現象にポカンとするしかなかった。しかし、だんだん驚きが込み上げてくる。

「嘘や……え、これ、マジ？」

普段大抵のことが起きてもゲロツとしているテンリも、さすがにこれには驚きを隠しきれない様子だった。

「コノハ！ ほっぺ、ほっぺ！」

「えっ？ あ、うん」

テンリが顔を出して私に頬を抓るよう要求。私は緩めにぐいぐいテンリの頬を抓る。すると、テンリも私の頬を緩めに抓り返してきた。

「どや？」

「テンリ……夢やない、リアルやで……」

頬に軽い痛みを感じる。私とテンリは、サラの変身が現実のものであることを受け入れざるを得なかった。一方、カリンはと言うと……

「うおおおおおおお！ 萌え萌えギンギンウウウウウウウン！」

発狂していた。きっかりガッツポーズを決め、わがままを言う子供のように激しく地団駄を踏む。こっちのリアクションは例外じゃないだろうか……

「コオン♪ コオン♪」

キツネに変身したサラがしゃべる。いや、鳴いていると表現した方がいいかもしれない。動物の表情を読み取ることは難しいが、喜んでいるみたいにシツポをパタパタ振っている。



「かわええええええええええ！ キツネのサラさん、めっちゃかわええええ！ はあ、触りたい。もふもふしたい……」

カリンの手の指がわしゃわしゃ動く。これはヘンタイの動きだ。カリンがはしゃぐ一方、私とテンリがこの異質な状況に動けないでいると、サラの方から私達の方に近寄って来た。慣れた足取りで、前足、後ろ足を交互に動かして、脱げた服の上からトテテとこちらにやって来る。シツポは楽しそうに左右に揺れている。

「キーン！」

可愛らしい高い声で鳴く。私達の前にやって来たサラは、一旦お座りして、私達を順に見回した後、頭を近付けてきた。

「えっ？ えっ？ ど、どうしたらええん？ さ、触ってええんかな？」

私が動揺していると、カリンが嬉しそうにサラの頭を撫でた。

「キーン！」

なでなで。カリンが優しくサラの頭を撫でる。サラは嬉しそうな鳴き声を発した。可愛い。しかし、このキツネは本物のキツネではない。さつきまでサラだったのだ。それを動物扱いして、頭を撫でるなど……してもいいことなのだろうか？ カリンは何の抵抗もなく幸せそうに頭を撫でたり、喉元をこちょこちよしたり、だっこしてみたりしているが……私とテンリはさつきまで人だったものにそんなことはできずにいた。

「ほら、コノハも頭撫でてみ」

カリンが本物の動物を扱う風に、キツネに変身したサラを私に薦めてくる。

「え……でも……このキツネ……サラさん……？」

「ええねん、ええねん！ さあ、もふもふ気持ちええから、触ってみ」

「コンコン♪」

カリンの薦めに、サラも触ってほしいと言っているように鳴いた。サラの耳が小刻みにぴこぴこ動いている。それを見ているだけでも可愛い。

「ほ、ほんまにええんかな……」

私はチラッと横目でテンリを見た。

「よ、よし。それじゃ一緒に触ろうや、コノハ」

テンリが意を決したように言った。

「う、うん」

私とテンリがそつとサラの頭に手を伸ばす。

「あつ」

ふわふわして触り心地が良い。サラが心地良さそうに目を細める。それを見るとますます頭をなでなでしたくなる。シツポももふもふだ。

「か、かわええ……」